

民俗芸能と年中行事断章

—シアター公演の回顧と記録—

八 木 透

はじめに

宗教文化ミュージアムでは、平成16(2004)年にアジア宗教文化情報研究所として発足して以来、ほぼ毎年のように六斎念仏・大念仏狂言・祇園囃子・神楽等の民俗芸能、および能・狂言・落語等の伝統的舞台芸能の公演を行ってきた。過去5年間に限ってみても、たとえば平成26(2014)年には「唄う念仏、踊る念仏—京・若狭の六斎念仏①②」および「嵯峨大念仏狂言」を、平成27(2015)年には「念仏踊りの道—エイサー・じゃんがら・六斎念仏」を、平成28(2016)年には「協演」祇園囃子—まつりを奏でる・「乙訓、鶏冠井の題目踊り」・「播州明石・大蔵谷の獅子舞」を、平成29(2017)年には「大念仏狂言—千本ゑんま堂大念仏狂言と嵯峨大念仏狂言の協演」を、そして平成30(2018)年には「重陽の節供—講演と能のワークショップ」および「壬生大念仏狂言」を実施してきた。改めて振り返ってみると、過去15年間に39回のシアター公演を行ってきたことになる。開館当初はシアターに足を運んでくれる客もまばらであったという記憶があるが、近年ではすっかり定着し、毎回満席の観客を迎えている。これはもう、ひとつの歴史を刻んだといっても過言ではないだろう。当ミュージアムの特徴である、静的な展示と動的なシアター公演という、他館にはない独自の魅力を最大限に生かした活動を今後も展開していくことを切に望みたいと思う。

本稿の目的は、これまでに実施した民俗芸能と年中行事に関するシアター公演の解説文を抜粋して掲載することで、過去のシアター公演を回顧するとともに、今後の新たな公演に向けての指針を提示することを目的とするものである。

1 大念仏狂言

京都の大念仏狂言

京都には3つの大念仏狂言が伝えられている。それは、壬生寺に伝わる壬生大念仏狂言・千本ゑんま堂に伝わる千本ゑんま堂大念仏狂言・清凉寺(嵯峨釈迦堂)に伝わる嵯峨大念仏狂言で



写真1 壬生大念仏狂言 土蜘蛛



写真2 千本ゑんま堂大念仏狂言 二人名

ある。いずれもかつての大念仏会にともなった乱行念仏が芸能化したもので、本来は仏教の教えに根ざした信仰行事であった。3つの大念仏狂言のうち、ゑんま堂狂言以外はパントマイム、すなわち無言劇であり、ゑんま堂狂言にのみセリフが伝えられている。また壬生大念仏狂言を除いて、他は後継者不足によって昭和30年代以降中絶状態となっていたが、その後次々と復興をとげ、現在では壬生の分流とされる「神泉苑大念仏狂言」を加えて、四大念仏狂言として演じられている。

平安後期の天台宗の僧である聖応大師良忍が開いた融通大念仏の信仰は、ひとりの念仏往生が多くの人々の念仏往生を約束するというもので、鎌倉時代から南北朝、室町時代に庶民の間に広まった。その布教の拠点となったのが、嵯峨清凉寺や壬生寺、あるいは千本ゑんま堂のような、民衆の寄りあい場のような寺院であった。融通念仏を実践する法会が「大念仏会」という行事であり、やがて大念仏に狂言がともなうようになって発展してきた民俗芸能が今日の大念仏狂言である。大念仏は、本来は僧侶が行う仏教行事であったが、戦国時代から江戸時代頃には、それが一般民衆によって行われるようになり、それにつれて狂言がともなうようになっていったものと考えられる。

ゑんま堂大念仏狂言の歴史

ゑんま堂の大念仏狂言の創始については、詳細は不明であるが、平安時代後期に天台僧である定覚上人が布教のため、大念仏法会を始めた事が起こりと伝えられ、「ゑんまんの狂言はだーれが先は一じめた、でっかい坊主が一じめた」とわらべ唄の中にも紹介されている。その後一時中断するが、鎌倉時代の文永年間(13世紀)に、如輪上人により再興し、室町時代には隆盛を極め、その後も数々の変革を経て、今日まで伝えられてきた。

室町時代の16世紀中頃の京都の景観を描いたとされる、狩野永徳筆の「上杉本洛中洛外図屏風」にその様子が描かれていることから、室町時代後期には春の大念仏狂言として一般民衆に親しまれていたものと思われる。

ゑんま堂大念仏狂言は、昭和39(1964)年に後継者不足で中断し、さらに昭和49(1974)年に狂

言舞台と狂言衣装が消失して大きな打撃を受けたが、そのような不幸をばねにして、昭和50(1975)年に保存会が結成され、復興に力を注ぎ、また一般からも参加者を募るなどの努力を重ね、現在ではおよそ25名の方々が伝統の狂言を守っておられる。

千本ゑんま堂について

千本ゑんま堂は正式寺名を「引接寺」^{いんじようじ}といい、寛仁年間(11世紀初頭)に恵心僧都源信の弟子の定覚上人が開いたと伝えられる真言宗寺院である。閻魔大王像を本尊とし、寺のある町名も閻魔前町といい、まさに閻魔づくしの寺である。室町時代には勧進能などの芸能も行われており、当時は京都西陣地域の町堂としての役割も果たしていたことがわかる。ここでは春の大念仏狂言と、8月のお盆に行われる精霊迎えである「六道参り」が有名である。千本ゑんま堂には、東山にある珍皇寺と同様に小野篁^{たかむら}の伝説があり、一説には小野篁がこの寺の開基だともいわれている。小野篁とは平安時代の学者・詩人で、多くの漢詩集や歌集を残したと伝えられる人物であるが、また彼は「野狂」ともよばれ、奇行も多く伝えられている。昼は朝廷に務め夜は地獄の閻魔庁に出勤していたとか、亡き母親の霊に出会うために「六道の辻」の井戸からあの世へ通っていたという伝説もある。京都の南東角の葬地が珍皇寺のある鳥辺野ならば、北西角の葬地は今日の舟岡山の北部に広がっていた蓮台野で、引接寺はその入口に立地している。このことから、引接寺に珍皇寺と同様の小野篁の伝説や、盆の精霊迎えの行事が伝承されていたとしても不思議ではない。

かつての葬地は今日の墓地とは異なり、一歩中へ踏み込めば死体や髑髏が転がるまさに地獄の世界であった。その入口に地獄の帝王である閻魔大王を祀り、そこから死者をあの世へ送っていたのである。今日の京都の人々が、盆に帰ってくる先祖の霊をそのような場所から迎えることは、かつての人々の「あの世」に対する意識を象徴的に表しているといえよう。さらに京都の人々は、ここに小野篁という特殊な能力を持った人物をオーバーラップさせた。またそのような寺院で大念仏会を行い、それが今日の大念仏狂言へと発展していったのである。

ゑんま堂狂言の公演と演目

ゑんま堂大念仏狂言は、基本的には拠点である千本ゑんま堂で毎年決まった時期に定期公演として演じられており、それは誰でも自由に見ることができる。2月3日の節分には夜にゑんま堂本堂にて、また5月1日から4日は境内の狂言堂にて演じられている。

今日ゑんま堂狂言に伝えられている演目は、合わせて27を数える。中でも決まって一番最初に演じられるのが、本尊である閻魔大王への奉納を意味する「えんま庁」である。この演目と「芋汁」のみが、笛・太鼓・鉦による、いわゆる「カンデンデン」の無言劇である。また一番最後には、守護役人の為朝に扮した者が参詣者に金剛杖をあてて、病氣治癒や災厄除けを祈願する「千人切り」が行われることになっている。千人切りでは、出演者全員が面をつけずに演

じることである。

嵯峨大念仏狂言の歴史

清涼寺(通称嵯峨釈迦堂)の大念仏の創始については、詳細は不明であるが、清涼寺に伝わる史料から、今から800年近く前の弘安2(1279)年に始まり、室町時代初期の応永21(1414)年頃にはすでに恒例化していたものと思われる。創始者は鎌倉時代に京都で融通念仏を広めたといわれる導御上人(円覚)で、この融通念仏が大念仏会のルーツであるとも伝えられている。少なくとも江戸時代初期の17世紀には、清涼寺において大念仏狂言が定例の行事として行われるようになっていたようだ。たとえば17世紀後半に書かれたとされる『日次紀事』には、嵯峨大念仏狂言が、3月に7日間にわたって演じられたとする記載が見られる。このように、嵯峨大念仏狂言は江戸時代から近年まで、嵯峨を代表する民俗芸能として続けられてきたのである。

嵯峨大念仏狂言の運営と組織

嵯峨大念仏狂言は、元々上嵯峨土着の住民によって伝えられた民俗芸能であり、その組織を「社中」と称していた。基本的には世襲制で、長男が父親の跡を継いで社中に加入した。また狂言のはやし方は、笛以外の鉦方は、もとは清涼寺の大念仏を行う「大念仏講(鉦講)」とよばれるメンバーが担当していた。狂言が大念仏と深い関係にあった名残だといえる。大念仏講の講員は狂言の社中を引退した古老たちで構成されていたといわれることから、狂言に精通した者たちが鉦を中心としたはやし方を務めていたことになる。

なお、今日では嵯峨大念仏狂言は国の重要無形民俗文化財に指定されたこともあり、その活動と保存は、「嵯峨大念仏狂言保存会」という組織が一切を担っている。

狂言の面と装束

嵯峨大念仏狂言では、新調したものも含めると、50種類以上の面を伝えている。その中でもっとも古いものは、室町時代の天文18(1549)年の銘を有するものであり、古式の面が長く保存されてきたことがわかる。また狂言の装束も多種多様な種類を伝えており、演目と役柄によって使い分けられている。なお面に関しては、いわゆる「嵯峨面」との関係について考える必要がある。嵯峨面は長い間途絶えていたが、昭和初期に復興され、今日では土産物として有名になっている。この面は、桜材の木型に和紙を張り重ねて作る素朴なものであり、家に飾っておくと魔除けになると伝えられている。この嵯峨面も、古くは大念仏狂言の面と深く関わっていたと考えられるが、今日では詳細は不明である。

嵯峨大念仏狂言の演目

嵯峨大念仏狂言で伝えられている演目は、合わせて25演目を数えるが、今日までに復活を見

ていないものもあるため、現行では20演目である。それらは、たとえば〈愛宕詣〉・〈花盗人〉・〈大原女〉などの「ヤワラカモン」と、〈羅生門〉・〈土蜘蛛〉・〈大江山〉などの「カタモン」の2種に分けられ、だいたい交互に演じられることが多い。「ヤワラカモン」とは狂言仕立ての曲を、「カタモン」とは能楽仕立ての曲を指している。



写真3 嵯峨大念仏狂言 釈迦如来

2 京都の六斎念仏

六斎日とは

そもそも「六斎」とは仏教でいう「六斎日」、すなわち月の8・14・15・23・29・30の6日間(日は異説もある)は悪鬼が出て人命を奪う不吉な日であるから、この日は精進潔斎して念仏を唱えるものという教えに発している。「六斎日」に対する歴史は古く、7世紀の飛鳥時代には中国から日本へ移入されていたことがわかる。ただ、当時は念仏を唱えるという習慣はなく、六斎日は殺生を禁じる日であったようだ。このような慣習は古代から中世の鎌倉時代まで続いた。

六斎念仏の創始と広がり

中世には「六斎日」に念仏を唱えて仏に祈るという慣習がおこり、やがてそれが庶民に浸透してゆくのは、14世紀から15世紀の、南北朝時代から室町時代にかけてであったと思われる。当時は、今日の奈良県や大阪府の諸地域に念仏講的な集団が結成されて、その集団による行事として行われていたようである。

16世紀の室町時代も後期に入ると、六斎念仏は京都を中心として、広域に伝播してゆく。それは京都近郊、特に大阪の池田・大津坂本などの村々にも、六斎念仏の講集団が結成されてゆく。しかし当時の六斎念仏は、あくまでも鉦と太鼓を中心として念仏を唱えるだけの素朴なものであり、今日見られるような、芸能を伴った派手な六斎念仏ではなかった。このような京都とその周辺地域の六斎念仏講中を統率していったのが、京都市左京区田中にある浄土宗光福寺(俗称・干菜寺・ほしなでら)である。この寺は早くから六斎念仏を伝える寺院として知られていた。

江戸時代の六斎念仏

江戸時代の中期、宝暦年間(18世紀中頃)の史料によれば、光福寺が支配下においていた六斎念仏講中は、京都近郊の白川村・東浄土寺村など100余村に及び、さらに宇治・近江坂本・丹波周山・山国をはじめ、遠く甲州・越前・若狭・肥後・筑前・泉州など広域に及んでいる。これらの地域の六斎念仏が干菜寺支配下に入るのは江戸時代後期のことであるが、それには大きな訳があった。

芸能化する六斎念仏と空也堂系六斎

江戸時代の18世紀中頃には、京都の六斎念仏には大きな変化がおき始めていた。それは宗教行事としての念仏を中心とした、古くからの伝統を引き継ぐ六斎念仏(=念仏六斎)を守ろうとする光福寺に対して、京都近郊の村々の若者たちを中心に、当時流行しつつあった芸能的要素を導入した六斎念仏(=芸能六斎)を演じようとする風潮が高まっていたことである。そのような風潮を受け入れたのが、中京区蛸薬師通堀川東入るにある天台宗寺院の空也堂(正式名称・極楽院光勝寺)である。平安時代に京都で踊念仏を広めたといわれる空也上人を開基と伝える同寺は、京都における下級の念仏僧たちの本拠地として中世から知られた寺院である。江戸時代の庶民の間では、空也堂は踊念仏や芸能を伴う念仏信仰の中心的寺院として定着し、それが芸能六斎を支える基礎となったものと思われる。すなわち光福寺(干菜寺)が六斎念仏講中に信仰的節度を厳しく強要したのに対して、もともと芸能的念仏を標榜していた空也堂は、念仏行事に芸能的要素を加えることに何ら抵抗を示さなかったのである。これによって、芸能六斎を志向した京都の主要な六斎念仏講中は空也堂に接近し、そのために光福寺は京都以外の遠方の六斎念仏講中を広く支配下におかざるを得なくなったのである。ここに六斎念仏は、「光福寺系」と「空也堂系」という二つの大きな派に分かれることになったのである。

現在の京都の六斎念仏

現在の京都には、基本的には14カ所に六斎念仏が伝承されている(=南区上鳥羽・南区久



写真4 嵯峨野六斎念仏 四段たぐり

世・南区吉祥院・下京区中堂寺・中京区壬生・中京区千本・北区西賀茂西方寺・北区小山郷・西京区桂・右京区西院・右京区梅津・右京区嵯峨野・右京区水尾・右京区西京極(今は演じておらず))。このうち、上鳥羽・西賀茂・西京極・水尾などを除いた大半の六斎念仏は、すべて芸能六斎である。京都の六斎念仏講中がなぜ早くから芸能的要素を取り入れていったかについては、例えば講中が盂蘭盆に各地を回って布



写真5 嵯峨野六斎念仏 神楽獅子



写真6 壬生六斎 棒振り

施を集めるようになると、必然的に信仰的要素以外に「人に見せる」、あるいは「人を驚かせる」必要が生まれ、特にそのような講中が複数あるときは、当然それらの競争が激化することによって、芸能化が一層進むという結果をもたらしたものと考えられる。

芸能六斎の特色

芸能六斎の特色は、まず18世紀頃から、当時の京都での門付け芸として知られた伊勢の太神楽(獅子舞い)や曲芸技を六斎念仏に取り入れたことである。さらに、例えば嵯峨野六斎では「越後獅子」を、梅津六斎では「越後さらし」を取り入れていったが、流行芸を取り入れた典型例は、祇園囃子の六斎念仏化である。祇園囃子の曲間にはさまざまな踊りが加わる。数ある中でも、祇園囃子の代表的な芸能は「棒振り」である。これは元々壬生六斎の工夫によるもので、18世紀から祇園祭綾傘鉾に奉仕していた壬生六斎念仏講中が棒振りを学び、また壬生大念仏狂言で棒振りを見せるという伝統もあり、その芸態を六斎念仏の中に取り入れたのである。さらに、壬生六斎念仏講中が工夫して普及したもう一つの芸態が「土蜘蛛」である。壬生狂言では江戸時代初期から、能狂言の趣向を取り入れて、能の「土蜘蛛」を演じてきたが、それをさらに六斎念仏に移入したのである。しかしそれは「伊勢太神楽」などと比べると時代的には少し遅く、江戸後期から幕末頃であったのではないかと考えられている。

3 節 供

節供とは

漢字表記としては「節句」という文字の方が一般的であるが、昔は「節供」と記されていた。節供は「^{せちえ}節会」・「節日」ともいい、今日でいう「祝日」に相当する。1年のうちの重要な神祭りの日であり、その時々決められた供物を神に供えて、神と人が共食したことに由来する。このような本来の意味が徐々に忘れられ、やがて江戸時代末期頃から季節の節目という意味に

理解されるようになって、「節句」という表記が現れ、明治になってそれが定着したものと考えられる。

今日でも正月の料理を「おせち料理」というが、これは節供に特別な料理を作って神に供え、そのお下がりをお客にいただくという本来の意味を今に伝える言葉である。だから当然のことながら、昔の節供は「休日」であった。「怠け者の節供働き」という言葉がそのことを如実に物語っている。

正月7日の人日、3月3日の上巳、5月5日の端午、7月7日の七夕、9月9日の重陽を「五節供」といい、平安時代に中国から伝わったもので、それが江戸時代になって民間に広まったといわれている。

人日の節供

正月7日を「人日」という。人日とは文字通り「人の日」という意味である。古代中国では、元日は鶏、2日は狗(犬)、3日は猪、4日は羊、5日は牛、6日は馬、7日は人の日としてそれぞれの吉凶を占い大切に扱った。7日は人に刑罰も与えず、7種の若菜を入れた粥を食べて、無病息災を願う風習があった。この風習が日本へ伝わり、年のはじめに若菜を摘んで、自然界から新しい生命力をいただく「若草摘み」という日本古来の風習と結びついて「七草粥」となり、平安時代の宮中の行事になった。さらに、江戸時代に「人日の節供」(七草の節供)として五節供のひとつに定められた。

上巳の節供

上巳は「桃の節供」・「雛節供」ともいい、今日では女子の節供として定着している。ルーツは古代中国で起こった「上巳節」で、これは旧暦3月の最初の巳の日を指す。のちに行事の日付が変動しないよう3月3日となる。元は女の子の節供ではなく、男女ともに無病息災を願う厄祓いの行事だった。平安時代ごろから、宮中の子女の間で紙の人形遊びが盛んになる。これを「ひいな遊び」という。この遊びが上巳節と結びつき、男女一対の「ひな人形」に子どもの幸せを託し、ひな人形に厄を引き受けてもらい、健やかな成長を願う節供となった。やがてこれが武家社会に広がると、5月5日の男の子の節供に対して、3月3日が女の子の節供となり、別名「桃の節供」として定着してゆく。桃の節供というのは、桃の木が邪気を祓う神聖な木と考えられていたためである。

端午の節供

端午は「菖蒲の節供」ともいい、一般には男子の節供とされている。この日には柏餅や粽を食べる慣習が見られるが、これも元は中国の慣習に端を発する。ところで、日本における端午の節供に欠かせない鯉のぼりとは、よくよく考えてみるとこれほど不思議なものはない。そも

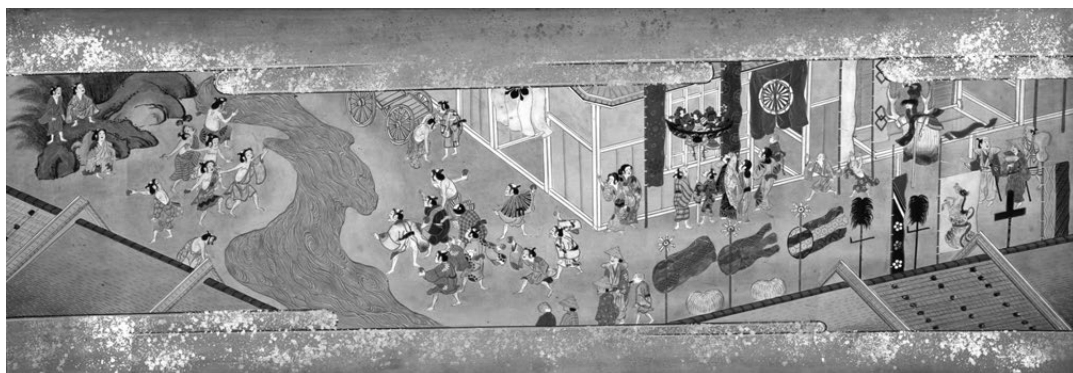


図1 佛教大学附属図書館蔵「十二月あそび 五月」(江戸時代)

そもなぜ魚が空を泳がねばならないのだろうか。鯉のぼりの起源はいったい何なのだろうか。この謎を解くためには、端午の節供の意味を考えねばならない。5月5日の端午の節供は男の子で節供であり、鯉のぼりを立てる他に、粽を食べたり武者人形を飾ったりする。また菖蒲湯に入ったり蓬餅を作って食べたりもする。一方で端午の節供は「女の家」ともよばれ、この日は女がいばれる日であるとか、女は仕事をせずに遊べる日であるなどの伝承が広い地域で聞かれる。男の子の節供であるはずの端午の節供が、なぜ「女の家」とよばれるのだろうか。5月すなわち「皐月」は、古くは田植えのための重要な月であり、「端午」は田植えを行う女性たちが田の神を迎えて祀るために忌籠りをして精進潔斎する日ではなかったかと考えられる。つまり「女の家」の伝承は、田植えという農民たちにとってきわめて神聖な行為を担う女性たちが、菖蒲や蓬などの厄祓いの効用のある植物で屋根を葺いて籠ったり、菖蒲湯に入って禊を行った名残なのである。それならば、女性のための節供がいつどのようにして男の節供にすりかわったのか。また武者人形や鯉のぼりはどのようにして生まれてきたのだろうか。

それは「菖蒲の節供」が、いつしか「勝負の節供」、「尚武の節供」にすりかえられたからではないかと思われる。その時期は、日本において男性中心の社会が定着する中世後期から近世にかけてだと考えられる。つまりかつての端午の節供の意味が忘れられて、言葉の語呂合わせによって女の節供が男の節供にすりかわったのである。

端午の節供が本来は女の節供であったのが、男の節供にすりかわったのだとすれば、鯉のぼりという奇妙な物体はどのようにして生まれたのだろうか。近世には鯉のぼりは存在しない。鯉のぼりが誕生するのはおそらく江戸時代末期から明治初期にかけてであろうと思われる。その背景には端午の節供に立てられた幟と、江戸時代の武士たちが端午の節供に飾った「武者絵」があったと考えられる。佐賀県や長崎県では、男の子の初節供に、親戚が鯉のぼりならぬ色とりどりの幟を贈る習慣がある。幟は神社の祭りの日に立てることからも、本来は神の依り代であったことがわかる。おそらくこれは、昔は田植えを行う女性たちが忌籠りをした場所に幟を立てて、田の神を迎えたことに由来するのではないかとと思われる。しかし近年の幟は男の子が逞しく成長するように願って贈られたのであるから、そこには武者絵や立身出世をイメー

ジする様々な絵が描かれていた。その中に鯉の絵もあったのではないだろうか。鯉は長寿であり、滝も溯って龍になることができる力強い魚であることから、男の子に贈る幟の図柄として好まれたのだろう。しかし幟の図柄としての鯉が、今日の鯉のぼりに変化するためには、もうワンクッションが必要である。それは鯉のぼりの先端に付いている鯉ではないもの、すなわち「吹流し」である。吹流しは、戦国時代には軍の陣地を表す標識であり、また聖域を示す標識としても使用されてきた。この吹流しがいつしか鯉に変身したものこそが鯉のぼりなのである。この変身には、相当奇抜な発想と商的センスが働いたであろうと思うが、いずれにせよ鯉のぼりはやがて日本全国に広まり、端午の節供には欠かせないものになっていったのである。

七夕の節供

七夕は星を祀る日だといひ、琴座のベガが織姫(織女星)、鷲座のアルタイルが彦星(牽牛星)の二星の逢瀬を祝い、中国で「乞巧奠」(きっこうでん)という行事が催されるようになった。織姫にあやかり機織りの技が上手くなるように、ひいては様々な手習いごとの上達を願う。「乞巧奠」が奈良時代の遣唐使によって日本に伝わると、宮中行事として取り入れられるようになった。宮中行事を伝承する京都の冷泉家では、今日でも古式の七夕の歌会や乞巧奠が行われている。日本では、盆に先立ち祖霊を迎えるために乙女たちが水辺の機屋にこもって機を織り、機を織る行事が行われていた。棚を作って機を織ることから「棚機」(たなばた)といひ、機を織る乙女を「棚機女」^{たなばたつめ}と称した。やがてこの行事と乞巧奠が交じり合い、現在の七夕の行事が形成されていった。元は7月7日の夕方^{きつぱい}の意である「七夕(しちせき)」とよばれていたものが、棚機にちなんで「七夕(たなばた)」という読み方に変化したものと思われる。なお七夕には短冊に願いごとを書いて下げる慣習がある。五色の短冊は、中国の陰陽五行説にちなんで「青、赤、黄、白、黒」の五色からきている。また、この日は索餅^{さつぱい}という餅を食べることが習わしとされていた。



図2 佛教大学附属図書館蔵「十二月あそび 九月」(江戸時代)

重陽の節供

今日、五節供の中でもっともなじみが薄いのが重陽の節供ではないだろうか。中国の古俗では、重陽には野山へ出て飲食し、また“登高”と称して丘や小高い山へ登る慣習があった。これは、方術の達人である長房という人物が、弟子の桓景に「来る9月9日にお前の郷里に大きな災厄がある。家の者に赤い袋を縫わせて、その中に茱萸^{しゅゆ}を入れ、それを持って山に登って菊の酒を飲



写真7 能楽 菊慈童



写真8 能のワークショップ 面付け体験

めば災厄から逃れられるだろう」と述べた。桓景がいわれたとおりにすると災厄が消えたという伝説に由来するものである。

また重陽の節供に欠かせないものに、「賀州の菊酒」がある。賀州とは加賀の国、つまり今日の石川県を指す。加賀の菊酒は「菊慈童」の故事になぞらえて造られた地酒である。菊慈童は中国の周の時代の仙童で、容姿が美しかったので王の寵愛をうけるが、16歳の時に罪を犯して流罪になる。配流先の南陽郡で菊の露を飲んで不老不死になったとする伝説を有する。この話は日本でも謡曲に仕組まれて民間にも広まった。菊酒はその香りと花の気品高さにより、邪気を祓い、寿命を延ばすと考えられていたようだ。

加賀の国では、手取川の上流に昔から野生菊が群生していたことから、その水は菊水とよばれ、この水を用いて酒を造ったともいわれている。菊水は先述のように不老不死の薬になるとの言い伝えから、この水で作られた酒は菊酒とよばれて重宝された。加賀の菊酒は、室町時代の15世紀から京都で好まれたという記録があり、秀吉も醍醐の花見の時に加賀の菊酒を褒めたたえたとも伝えられている。

ところで、日本には「菊人形」という独自の菊文化がある。菊人形は19世紀初頭に江戸麻布の植木屋が始めたもので、以後、大阪を中心に興行化したといわれている。中でも枚方の菊人形は有名で、明治43(1910)年より続いてきたが、平成17(2005)年を最後に96年の歴史に幕を下ろした。日本の貴重な文化がまた一つ姿を消したと、誠に心寂しい想いであったが、その後も毎年秋には、枚方パークで菊人形が何体か飾られ、市民団体が作成した菊人形の展示も行なわれている。

なお、いうまでもないが、五節供は元来旧暦で営まれてきた年中行事である。日本で旧暦から新暦に改められたのは明治6(1873)年のことである、すなわち明治5(1872)年の旧暦12月3日を新暦明治6年1月1日とした。旧暦と新暦とは、閏月が挟まると最大で五十日近いズレが生じることがある。ちなみに、平成30(2018)年の重陽すなわち旧暦9月9日は、新暦では10月17日にあたる。新暦9月初旬はまだ暑さが残り、菊を愛でる雰囲気ではないが、10月中旬ともなると秋もずいぶん深まり、菊花が美しい季節だ。このように、節供について思いをめ

ぐらす際には、旧暦による季節感を大切にすべきだといえよう。

〈主要参考文献〉

芸能史研究会編1982.『京都の六斎念仏』京都市文化観光局

植木行宣2001.『山・鉦・屋台の祭り』白水社

八木透編2002.『京都の夏祭りと民俗信仰』昭和堂

山路興造2009.『京都 芸能と民俗の文化史』思文閣出版

千本ゑんま堂大念佛狂言保存会編『千本ゑんま堂狂言』

八木 透2015.『京のまつりと祈り－みやこの四季をめぐる民俗』昭和堂